

陸庾連珠小考

横山 弘
天理大學

I 序

——凡そ一代には一代の文學有り。楚の騷、漢の賦、六代の駢語、唐の詩、宋の詞、元の曲、皆いわゆる一代の文學にして後世能く焉れを繼ぐ莫かりし者なり。

「宋元戲曲考」の序に見える王國維のよく知られたこの言葉は、文體と時代の認識の關係を明確に道破している。

文體ないしはジャンルというものは、作家の認識の要請に應じて出現するものである以上、その認識の消滅とともにその文體も存在の根據を失つて消滅する。とはいうものの、これはなお巨視的な論斷であつて、一度定立された文體は、それじしん一種の可塑性を有するから、その生命の

陸庾連珠小考（横山）

完全な終息にいたるまでには、時間の推移にともなう認識の變化をかなり辛抱よく迎え入れる。文學作品に對する文體論的接近の重要な任務の一つは、この點の慎重な考察にあるはずである。

六朝美文の集大成者と稱される北周の庾信（五一三—五八二）は、既成の、あるいは彼じしんの創造した多くのジャンルの作品を今に傳えるが、その中で、見逃すことのできないものに、「連珠」の文體による一連の作品がある。すなわち「文苑英華」卷七七一に收められた「擬連珠」四十四首である。

六朝のほゞ全期間にわたつて盛行したこの特殊な文體の歴史において、庾信の連珠作品は、いかなる認識を分擔したのであろうか。

清の李兆洛は、庾信の連珠に評して、「但だ身世を敘して理要に關する無し、連珠の別格なり。但敘身世、無關理要、連珠之別格也」といつている。^(注1)李氏のこの言は、庾信の連珠に與えられたほとんど唯一の古典的評價である。その後庾信の連珠に言及した先學としては、管見のおよぶか

ざりでは、鈴木虎雄博士^(注2)、高橋和巳氏等^(注3)があるだけであるが、鈴木博士は、「其の別格たるところ大に見るべきなり」と正しく考察の方向をさしめされつつも、原文にして十行に満たない言及のうちには充分な分析を展開される餘裕をもたれなかつた。また高橋氏は、主として陸機の作品に議論を集中したその論考においては、庾信については、ただ一言、「尤も北周の庾信（五一三—五八二）の連珠は、より傳統的形態の政治論ではある」と、その眞意を了解すべくあまりにも短い論評を與えられたにとどまる。

わたくしは、この小論において、考察の方向を、鈴木博士の示されたように李兆洛のいわゆる「別格」なる評語の方向に定めるものである。そうして、比較考察の媒介を、庾信以前の最大の連珠作家陸機（二六一—三〇三）の作品にかぎつて分析を試みることにする。という理由は、六朝時代あればど流行したこの分野の作品も^(注4)、「文選」には、結局、ただ陸機の作品だけしか録しておらないこと、現存する作品に照しても陸機の「演連珠」五十首は量的にも第一であること、そしてなによりも六朝期にあつて、陸機の連

珠作品は、このジャンルの典型として意識されていたこと^(注5)等による。

つまり、陸機と庾信の連珠を考察することは、文體としての連珠の可能性を考へることであるといつてさしつかえない。

陸機および陸機にいたるまでの、連珠の沿革については、すでに高橋氏の前記論文が正確詳細に論じておられるので、今は重複を避け、直ちに本題に入りたい。

Ⅱ 普遍と個別

原理一般への飛翔、普遍への志向、これこそ陸機の連珠が、士人の遇不遇という傳統的なテーマに即しつつ、従來の連珠から自身を區別する特性であつたが、陸機より二世紀餘りの時間を経た庾信の連珠の志向する方向は、陸機の方向の延長線上にはなくて、かえつてそれとは逆の方向に延びていた。

處女作というものが、その作家の後年の作品のミクロコスモスであるように、連作の第一首は、それじしん連作の

全世界を集中的に具現するものである。庾信の「擬連珠」の第一首を示そう。

「蓋し聞く、天を經し地を緯するの才、山を抜き海を超ゆるの力、戰陣は風颯より勇に、謀謨は胸臆より出で、長鯨の鱗を斬り飛虎の翼を截ると。是を以つて一たび怒れば諸侯懼れ、安居して天下息んず」

「蓋聞、經天緯地之才、拔山超海之力、戰陣勇於風颯、謀謨出於胸臆、斬長鯨之鱗、截飛虎之翼、是以一怒而諸侯懼、安居而天下息」

「凌雲の健筆意縱横たり」という杜甫の評語は、おそろしくかかる作品の筆力をいうのであろうが、しかしながら、

「經天緯地之才」、「拔山超海之力」は、もはや陸機の「臣聞く、鬚俊の才は世に希乏なる所なり。丘園の秀は時に因りて則ち揚ると。是を以つて大人命を基むるに、才を后土より擢かず。明主聿に興るに、佐を臯蒼より降さず」(「演連珠」第三首)

「臣聞、鬚俊之才、世所希乏、丘園之秀、因時則揚、是以大人基命、不擢才於后土、明主聿興、不降佐於臯蒼」

陸庾連珠小考(横山)

に於ける「鬚俊の才」、あるいは、

「臣聞く、虐暑天を熏するも堅氷の寒を減ぜず。涸陰地に凝るも陵火の熱を累すなしと。是を以つて吞縦の強も蹈海の志を反す能わず。漂鹵の威も西山の節を降す能わず」(第四十八首)

「臣聞、虐暑熏天、不滅堅氷之寒、涸陰凝地、無累陵火之熱、是以吞縦之強、不能反蹈海之志、漂鹵之威、不能降西山之節」に於ける「蹈海之志」、「漂鹵之威」のような原理一般の次元にあつての「才」ないし「力」ではなく、現實の地平にあつての「才」ないし「力」、すなわち王肅十萬の兵を坑にし、東昏の息の根をとめて天下に覇をとなえた蕭衍、後の梁の武帝を具體的に指している。かく、第一首の範圍内でも、庾信の關心が普遍ではなく個別へむかつていることは、われわれの目に明らかとなる。齊末の世紀末的混亂の中から崛起してゆく若い日の武帝の形象を、連珠の形式をかりてかように描破した庾信は、つづく第二首で、時機到來、南康に位に即き、魏氏と南北を中分する大梁の盛世を追憶する。

「蓋し聞く、蕭曹しやうせうの贊務さんむするは雄略の資する所、魯衛ろゑいの前驅ぜんくするは威風の假する所なりと。是を以つて黃池の會は、以つて諸侯に長たるを争う可く、鴻溝の盟は、以つて天下を中分す可し」

「蓋聞、蕭曹贊務、雄略所資、魯衛前驅、威風所假、是以黃池之會、可以爭長諸侯、鴻溝之盟、可以中分天下」

中興二年、五〇二年、正月甲寅、大司馬蕭衍は位を相國に進めた。庾信によつて漢の蕭何曹參に擬される蕭衍は、梁王を経て、この年夏四月丙寅、齊の讓りを受けて即位し、天監と改元する。「魯衛」云云というのは、群侯の中にあつて蕭衍のみ獨り事をスムーズに運ぶことができた原因の一つ、前齊との同姓の利をさす。かくして、「哀江南賦」のいわゆる「草木の陽春に遇い、魚龍の風雨に逢えるがごと、五十年中、江表に事も無き」太平が現出するが、絶えざる自己變革をおこたる政治權力は、早晚、内部から崩壞してゆくこと、政治というメカニズムの本質に照して必然であつた。第三首において、早くも指摘される。

「蓋し聞く、封豕ほうしの結を解き長蛇ちやうだの源を塞がんには、必

ず裳を千里に製し血を轅門えんもんに唾つるを須もとうと。是を以つて百里の圍を開くに陳平の一策を用い、千乘の國と盟うに季路の一言を須もとう」

「蓋聞、解封豕之結、塞長蛇之源、必須製裳千里、唾血轅門、是以開百里之圍、用陳平之一策、盟千乘之國、須季路之一言」
梁武帝は、既に陳平の奇策なく季路の諫言なきままに、封豕長蛇、侯景のいつわりの内附を許してしまふ。さらには人材の誤用。

「蓋し聞く、賢を得て斯こゝに在らしめば、鋒はものを揮かうを藉からず。股肱こつぱい良い哉、變に應ずるを論ずる無しと。是を以つて屈倪くつげい參乘して諸侯は方城の圍を解き、干木かんぼく臣と爲りて天下に西河の戦い無し」(第四首)

「蓋聞、得賢斯在、不藉揮鋒、股肱良哉、無論應變、是以屈倪參乘、諸侯解方城之圍、干木爲臣、天下無西河之戰」

楚の大夫屈倪、魏の文侯の客段干木、かかる賢才は武帝の用いる所ではない。比喻表現に依る故に、「哀江南賦」の如く「宰衡さいこうは干戈を以つて兒戲と爲し、縉紳しんしんは清談を以て廟略と爲す」とあからさまには敘述しないが、倪璠の解す

るように、この首は、朱异等の輩が天下を委ねた武帝の錯誤を諷するであろう。以下、「擬連珠」四十四首の前半、第二十首までは侯景の亂の一部始終を、後半二十四首は魏に入つてより現在にいたる個人、庾信の歴史の、苦澁にみちた再検討についてやされる。

さて、庾信の連珠と陸機の連珠を、テーマの面から比較するとき、次のような兩者の特性が明らかとなる。

まず、陸機の「演連珠」は、きわめて原理一般に偏するものであつた。なるほど陸機にも、

「臣聞く、絶節高唱は凡耳の悲しむ所にあらず。肆義芳訊は庸聽の善する所にあらずと。是を以つて南荆には和すること寡すくなきの歌あり。東野には釋とかれざるの辯あり」

(第二十三首)

「臣聞、絶節高唱、非凡耳所悲、肆義芳訊、非庸聽所善、是以南荆有寡和之歌、東野有不釋之辯」

といつた、作者じしんを寓するとも讀みうる章は散見する。しかし、かかる章にあつてさえ、比率はむしろより多く一般論にかたむくといつてさしつかえない。他のほとん

陸庾連珠小考(横山)

どすべての章は、最初から一般論として提出されたものである。少くとも、陸機の視點は、自己へとむかつているのではなく、個をはなれた抽象へむかつてすえられている。一方、庾信の「擬連珠」は、視點が最初から個にむかつて定められているのであつて、

「蓋し聞く、三世兵を用うるは、既に貽いざ厥にあらず、陰謀を累ぬるは、必ず凶を以つて終らんと。是を以つて李都尉の風霜も、蘭山に上つて箭盡き、陸平原の意氣も、河橋に登つて路窮まれり」(第十五首)

「蓋聞、三世用兵、既非貽厥、陰謀累葉、必以凶終、是以李都尉之風霜、上蘭山而箭盡、陸平原之意氣、登河橋而路窮」
あるいは、

「蓋し聞く、彼の司牧を樹つるは、既に百姓の命を懸くるなり。世を厭うに及びては、復た天下の心を傾くと。是を以つて一馬の奔るや、一毛として動かざる無く、一舟の覆くつがえるや、一物として沈まざるは無し」(第十九首)
「蓋聞、樹彼司牧、既懸百姓之命、及乎厭世、復傾天下之心、是以一馬之奔、無一毛而不動、一舟之覆、無一物而不沈」

のごとく、家風ないしは王權に關する原理一般を陳述したものと讀まれなくもない章も存在するが、これらとても、裏には必ず個別的對象（前者では、江陵の敗戦における胡僧祐、王褒等、後者では梁武帝そのひと）、が下じきとなつてゐるのである。

姜亮夫によれば、陸機の「演連珠」五十首の製作時期と彼の履歴との關係は、全く不明であり、入洛の前か後かすら確認不可能といふ。^(注7) 少くとも、テーマの分析を通しては、われわれもまた、姜氏の結論に加える手がかりは見出し得ない。ところで、庾信の「擬連珠」四十四首は、テーマが専ら彼じしんの體驗した歴史事實に限定され、かつ各おのの歴史事實は、時間の帶の上に、順を追つて配置される。「哀江南賦」、「擬詠懷詩」、「擬連珠」等、北遷後の秀作は、テーマ、語彙の兩方からみて、庾信の最晩年のある時期に集中的に制作されたと推定しうるのであるが、「擬連珠」についても、テーマの上から、制作の時期はかなりはつきりした所までつきとめることができる。第四十二首に展開される不氣味なイメージ、

「蓋し聞く、脣吻を磨礪し齒牙を脂膏し、風に臨んで毒を扇ぎ、影に向つて沙を吹くと。是を以つて敬して之れを遠ざく、豺に五子有るを。吁、畏る可き也、鬼は一車有り、」

「蓋聞、磨礪脣吻、脂膏齒牙、臨風扇毒、向影吹沙、是以敬而遠之、豺有五子、吁可畏也、鬼有一車」

これは倪璠にしたがえば、「宇文楊氏の諸君、姓を易えて興り、晉護（宇文護）、滕道（宇文道）の屬、權を争いて相殺す」さまを喩えたものであつて、北周の靜帝が隋王楊堅に位を禪つたのは、大定元年辛丑、即ち隋の開皇元年（五八一年）のことであり、北史の本傳が誌す庾信の卒年もまた、この年にあるのであるから、「擬連珠」の制作は、實に、六十九歳で生をおえるその年にあつたかもしれぬ。第二十六首はいう、

「蓋し聞く、珪を執りて楚に事え、博士秦に留る。晉陽に思歸の客あり、臨淄に羈旅の臣ありと。是を以つて親友會同するも、懷撫の悽愴たるを妨げず、山河の離異たるも、風月の人に關するを妨げず」

「蓋聞、執珪事楚、博士留秦、晉陽思歸之客、臨淄羈旅之臣、是以親友會同、不妨懷撫悽愴、山河離異、不妨風月關人」

「思歸之客」、「羈旅之臣」なる形容こそは、生活者としてはもとより、藝術家としても、庾信に與えうる最も適切な規定でなければならぬ。第二十七首はいう。

「蓋し聞く、五十の年、壯情久しく歇ぎ、憂いぞ能く人を傷る。故れ其れ哀しいかな矣と。是を以つて之れを交讓に譬うれば、實は半ば死して言に生き、彼の梧桐の如く、殘生ありと雖も猶お死せるがごとし」

「蓋聞、五十之年、壯情久歇、憂能傷人、故其哀矣、是以譬之交讓、實半死而言生、如彼梧桐、雖殘生而猶死」

「五十の年」は概數をあげたものであろうが、かえりみるに、はじめて關に入つたのは信三十九歳のことである。

梁陳の禪讓は四十五歳、五十歳といえば、北周では武帝宇文邕の保定二年にあたり、相對的安定期に入つた南北關係は、連年のように人事の交流をみるに至らしめた。すなわち、前年六月には北地流寓の士のうち、王克、殷不害等は放免されて江南の地に還つている。同じ年十一月には、陳

陸庚連珠小考（横山）

使來聘、この年正月には、前前年より北周へ往來していた故舊、陳での尙書周弘正が再び江南へ還つた。庾信は、詩を裁して送別しているが、その一つは、この世における生の一回性、ただ獨り生まれ來たりただ獨り死にゆく人間の、主體性の自覺が、平易な措辭のうちにも明らかに示されている。

河橋兩岸絶 河橋は兩岸絶たり

横岐數路分 横岐は數路に分る

山川遙不見 山川 遙かに見えず

懷袖遠相聞 懷袖 遠く相い聞す

（「重別周尙書」其二）

きつぱりと二手に絶てられる兩岸、おのがじしその行き先をことにする、いりくんだ横岐、庾信は、他人によつては絶対に代行され得ず、永遠の面前にただひとり立ち、永遠性と時間性の綜合である「人間」を、その主體性に依據して全的に生きることが、いま始めたばかりなのであつた。

「楞嚴經」の説くところによれば、「世界」とは、過去・

現在・未來を意味する「世」と、東西南北上下を意味する「界」との綜合である。この説明を用いるなら、陸機の「演連珠」が、より多く「界」をテーマとするのに對し、庾信の「擬連珠」は、「世」を主調とするといえよう。テーマにおける兩者のほほ相反する様相は、文體としての連珠の二つの可能性を象徴するものである。次には、兩者を、構造のしくみにおいて分析することが手つづきとして求められる。

Ⅲの1 指示と效果

I・A・リチャーズによれば、一般に言語命題 (statement) には、それが眞實あるいは虚偽の指示 (reference) のために用いられる場合と、それがひき起す指示が情緒や態度にあたえる效果 (effects) のために用いられる場合との二つの用法が區別される。前者は「ことばの科學的用法」(scientific use of language) ないし「ことばの象徴的用法」(symbolic use of language) であり、後者は「ことばの喚情的用法」(emotive use of language) である。^(注8)

(リチャーズがこのことを強調するわけは、純粹に科學の言語でもなく、さればとて純粹に詩の言語でもない、具體的な場における多くの言語には、種々の比率で兩者が混在しているために、故意または不注意による兩者の混同が、しばしば言語による不幸をまねいているからである。)

連珠という文體も、その歴史に照して考察すれば明らかになるように、具體的な場における言語として、言語のこの二機能を自體に共存させてきた。文體としての連珠の源をきわめようとした人々によれば、それは「韓非子」、「淮南子」、「鄧析子」、「鹽鐵論」等に求められるという。^(注9) 論者はしばしば自説を固守して他を排しているが、要するにこれらは議論のための言語である。議論文であるからには、發言の論理的な正確さがまず要求される。かくして連珠の言語が、「指示的」側面を濃厚に保存している理由が明らかになる。いま、傳文の定義にたちもどつて検討するに、^(注10) たとえ「指説」することなく「必ず喩を假る」にしても、ともかく「事情」の「旨」を「達」せんとするものであり、「賢者(覽者)」に「微かに悟」らしめんとする「指示物」

をもつていた。

一方、その「辭麗なびて言約」という側面は、議論文のめざす方向とは、むしろ逆の方向をさしている。また「歴歴として珠を貫くが如くせしめん」とする形態上の特徴は、「指示」のために作用すると同時に、「效果」のために一層大きなはたらきをする。少くとも、その可能性を最初からその形態じしんのうちにはらんでいた。連珠の歴史が齊梁の段階に入ると、その側面が明瞭に出現してくる。「廣弘明集」卷三十に收められた梁の簡文帝の「連珠三首」は、連珠のもつ「喚情的」機能が、極端に發揮された例として注意されよう。

梁の太清五年（五五二）八月、侯景のために永福宮に幽閉されていた簡文帝は、筆を援つて「志を述ぶる」詩一首と連珠三首をつくつた。その「自序」にはいう。「有梁の正士、蘭陵の蕭綱は、身を立て己を行い、終始一の若し。風雨晦きが如く、鷄鳴己まざるに、暗室を欺かず。豈に況んや三光しばしば此に至るをや。命なり、如何せん。」きわめて切迫した状況の中に制作者は身を置いている。「吾

聞く」という他に類をみない、あからさまな一人稱でおこる、その第三首は、たとえば、次のようである。

「吾聞く、道行われば則ち五福俱とに泰とおるも、運閉とずれば則ち六極の鍾あつる所なり。是を以つて麟出とでて悲しむ、豈に唯だ孔子のみならんや。途窮して則ち慟く、寧んぞ止だだ嗣宗のみならんや」

「吾聞、道行則五福俱泰、運閉則六極所鍾、是以麟出而悲、豈唯孔子、途窮則慟、寧止嗣宗」

梁書の本紀には、「文甚だ悽愴」と附言されているが、このような、直ちに自己を表白して、それがあたえた「效果」の面から、「甚だ悽愴」などと評された連珠の例は、これより先には見いだされない。

Ⅲの2 指示または空間

連珠という文體が、「指示的」側面と「喚情的」側面を、その文體じしんに由來するものとして合せもつことの可能性、および、その若干の實例を、あらあら述べた。連珠の文體のおもしろ味は、思うに、リチャーズのいい方をかり

ていう、この「指示的」側面と「喚情的」側面の交錯のありようのうちにこそ存する。原則的にいえば、藝術作品としての連珠の、あり得べき上乘の作とは、この二つの側面が高度に結合したものであるはずである。

とはいえ、われわれに残された、この文體の二大雄篇、陸機の「演連珠」と庾信の「擬連珠」には、この二つの側面のふくみ方に、きわだつた差異が認められ、また、兩者の差異にこそ注目することが、連珠という文體の可能性をさぐる有効な方法であると信ずる。

庾信の作品を比較の媒介とするとき、陸機の作品のもつきわだつた差異は、大まかにいつて、「喚情的」側面に對する「指示的」側面の優位である。

こころみに、陸機の連珠のうちから、構造の最も簡単なものを一首あげよう。

「臣聞く、燧を鑽り火を吐いて、以つて湯谷の晷に續ぎ、
翮を揮い風を生じ、而して飛廉の功に繼ぐと。是を以つて物は微にして著を毗くるあり。事は瑣にして洪を助くるあり」(第十九首)

「臣聞、鑽燧吐火、以續湯谷之晷、揮翮生風、而繼飛廉之功、是以物有微而毗著、事有瑣而助洪」

燧を鑽つて採取したわずかの火、翮を揮つて生ぜしめたわずかの風、それらもまた、よく日晷の明、風神の吹に加うるところあるものである、という比喻は、呂延濟の注にいうように、「小能の人も亦た大業を贊助すべき」旨を諷する。比喻は、(この場合、「是以」以下に展開される)、抽象的、一般的命題の眞なることを證明すべく用意されたものである。主觀の單なる表白のために用意されたもの、描寫のために用意されたものではない。この場合はしかし、援用された二つの比喻は、同一の方向に認識が反復される、いわゆる正對にすぎず、對句の性質からいえば、庾信の連珠に現れる大部分の對句と軌を一にするものであるが、空間的に擴大しようとする陸機の認識の意欲は、對句構造にあつては、反對の方向、推理の形式にあつては、多元化多層化の方向へむかう。

たとえば、第二十八首。

「臣聞く、身より出ずる者は、物を假りて陸んにする所

に非ず。時に牽かるる者は、克己の勗とくむる所に非ずと。

是を以つて利は萬物を盡すも、童昏の心をおも劦あきらかにする能わず。徳は生民に表たるも、棲遑の辱を救う能わず」

「臣聞、出乎身者、非假物所隆、牽乎時者、非克己所勗、是以利盡萬物、不能劦童昏之心、徳表生民、不能救棲遑之辱」

堯の化天下に光被するも、その子丹朱の闇愚を革むる能わず、孔子の徳生民に冠たるも棲棲遑遑として席暖まるに暇なし、という比喻は、なお命題の形としては肯定命題で書かれてはいるが、同じ内容の並列ではない。一方は個人に對する言及であり、一方は社會に對する言及である。個人でも社會でも、それじたいに由來する原因によつて、ダメな場合は、運命論的にダメである、という斷案に對應して比喻の部分も、一章のうちに、個人と社會と兩方を同時にのべている。先の例に比すれば、一步進んだ段階にある。ところで、庾信の連珠にあつては、この程度の對句構成すら、すでにきわめて少數の例にしか見ることができなくなつてしまふ。

「蓋し聞く、天方あまに薦蹙すくせんとし、喪亂おぼ弘ほに多ければ、

陸庾連珠小考（横山）

空しく劔を説くを思い、徒らに戈に枕するを聞くと。是を以つて劉琨の英略、自ら免るるを知る莫く、祖逖の慷慨、裁きかに能く河を渡る」〔擬連珠〕第十一首

「蓋聞、天方薦蹙、喪亂弘多、空思説劔、徒聞枕戈、是以劉琨之英略、莫知自免、祖逖之慷慨、裁能渡河」

この例は、庾信の連珠のうちでは、最も複雑な構造をもつものである。劉琨云云の一句、鮮卑の段匹磾だんひつていの術中に陥つて縊られた晉將劉越石りゆうけつせきとは、陳霸先の手に縊られた王僧辯をなぞられたものと倪璠げんはいう。一方、祖逖云云の一句、中流に楫を撃つて慷慨した晉將祖逖とは、倪璠によれば陳霸先の謂であるが、この典故やや複雑で、斷然江を渡つて石勒と對決した祖逖とはことなり、陳霸先のたのむに足らざるをいうのである。劉琨云云の一句は否定の句造り、祖逖云云の一句は肯定の句造りとなつている點は、なぞらえた對象がことなる複雑さを一段と複雑にはしているのであるが、庾信の對句の屈曲はこの程度までにとどまる。

陸機の場合、さらに進んで、次のような段階にいたる。

「臣聞く、煙を尋ね芬を染むるに、薰息むも猶お芳し。

音を徵し響を録するに、操終れば則ち絶ゆ。何となれば則ち、世に垂るる者は繼ぐべく、身に止まる者は結び難ければなりと。是を以つて玄晏の風は恆に存し、動神の化は已に滅ぶ」(第二十四首)

「臣聞、尋煙染芬、薰息猶芳、微音録響、操終則絶、何則垂於世者可繼、止乎身者難結、是以玄晏之風恆存、動神之化已滅」

一首の構造を検討しよう。まず「煙を尋ね芬を染むるに薰息むも猶お芳し。音を徵し響を録するに、操終れば則ち絶ゆ」の二句で構成される部分は、一首全體にあつて、「是を以つて」以下の二句によつて示される斷案の眞實性を象徴するための比喩であり、推論の形式上の役割からいへば、この比喩は、「玄晏の風は恆に存し、動神の化は已に滅ぶ」(五臣注呂延濟の解説によれば、それぞれ、周公孔子は死後においてなお禮教の風を存し、堯舜世を去れば至道の化もすなわち滅すること、であるが) という斷案に資する傍證である。「音を徵し響を録するに、操終れば則ち絶ゆ」という比喩は、劉孝標の注によれば、たとえば、兎説、惠施らの獨善的な詭辯思想は、その提唱者の没後後繼者を得がたいこと、

蘇秦張儀の如き策謀家は、一旦權力の坐からはなれるや自己の政治生命は終焉を告げたこと、等々の事例をうちに含む。一方、「何となれば」以下の二句は、こうして眞實性を保證された斷案の成立する理由を明かした部分である。

そうして、「舉例」、「理由」、「斷案」、三部分を構成する一組の對句は、たとえば、「薰息むも猶お芳し」という肯定的命題に對して、「操終れば則ち絶ゆ」という否定的命題が對置されている。僅々四十六字ほどで構成された一首の内藏する命題の數は、認識がそれぞれ逆方向にむかう二個一組のものが三對、計六個となるわけである。

陸機の連珠の對句における「反對」構成の意欲は、庾信の連珠の場合と比して、きわだつた對蹠を示している。

「臣聞く、遷世の士は匏瓜の性を受くるにあらず。幽居の女は懷春の情なきにあらずと。是を以つて名は欲に勝つ。故に偶影の操矜すなはなり。窮は逢に愈る。故に凌霄の節厲し」(演連珠「第三十一首」)

「臣聞、遷世之士、非受匏瓜之性、幽居之女、非無懷春之情、是以名勝欲、故偶影之操矜、窮愈逢、故凌霄之節厲」

この首の場合、「名、欲に勝つ」、「窮、達に愈る」は、同一の主題の反復であり、したがって、「遯世の士」云云、「幽居の女」云云の一組の對句も同一内容の反復であつて、對句構成は、「正對」的認識にもとづいてなされている。庾信の認識のかたちであるこのような對句は、陸機の場合、主流ではなく、陸機の目は同時に、

「臣聞く、巧は器に盡く。習數しばすれば則ち貫る。道は神に繋る。人亡べば則ち滅ぶと。是を以つて輪匠目を肆せしめにすれば、奚仲の妙に乏しからず。瞽叟耳を清ますも、而も伶倫の察なし」(第二十一首)

「臣聞、巧盡於器、習數則貫、道繋於神、人亡則滅、是以輪匠肆目、不乏奚仲之妙、瞽叟清耳、而無伶倫之察」
のように動いてしまふのである。

陸機の連珠の他のものにあつては、さらに、對句をなす各命題を構成する主辭と賓辭に、ことなる次元(典據)の典故を用いることもしばしばである。たとえば、第三十二首、

「臣聞く、聴くこと音を極むれば、鈞天の樂を慕わず。

陸庾連珠小考(横山)

身は蔭に足れば、垂天の雲を假るなしと。是を以つて蒲密の黎らは時雍の世を遺おぼれ、豊沛の士は桓撥の君を忘る」

「臣聞、聽極於音、不慕鈞天之樂、身足於蔭、無假垂天之雲、是以蒲密之黎、遺時雍之世、豊沛之士、忘桓撥之君」

に於いて、「是を以つて」以下の二個の命題は、「蒲密の黎」なる主辭に對して「時雍の世を遺る」なる賓辭を配し、

「豊沛の士」なる主辭に對して「桓撥の君を忘る」なる賓辭を配するのであるが、主辭と賓辭は、いずれの場合も、

同一の典據より出るものではない。すなわち、前者においては、「蒲」とは「孔子家語」に見える子路の統治した邑の名であり、「密」とは、范曄の「後漢書」に見える卓茂の治めた邑の名であつて、賓辭中の「時雍の世」が「尚書」の「堯典」に出ずると典據を同じくしない。また後者においても、主辭「豊沛」は「史記」に見える漢の高祖の擧兵の地であるのに、配する賓辭「桓撥の君を忘る」の「桓撥」とは「毛詩」「商頌」「長發」中の語彙である。

かくして、認識はますます多元化し、讀者の腦裏に興えられるそのリズムは、斷絶と映發の美をともなつて感覺さ

れるのである。

陸機の連珠の「體式」の豊かなこと、古今の連珠作品中の白眉と稱されるに背かず、あるいは比喩(事例)を先にし理由を後に明かすものあり、あるいは、先に理由を打ちだしてのち、斷案を比喩を介在させつつ提示するものありで、その變化の妙、あたかも、漆黒の夜空に、突如として無數の打上げ花火があがつて鳴りやまない、といった感がある。ことにも、斷案を、理由と比喩を完備しつつ提示する先の第二十四首のような章(駱鴻凱の分類にそつていえば、その第五式、第六式に屬するもの)^(注11)は、印度論理學でいう「因明」、ことに五世紀陳那によつて改良された「新因明」と形態が酷似する。駱鴻凱のいい方をかりれば、因明と「幽合」する。

新因明の模範的論式は、次のようである。

宗「聲は無常なり」・因「所作性なるが故に」・喩「諸の所作性のもは無常なり。瓶等の如し(同喩)。諸の常住なるものは所作性のもにあらず。虚空等の如し(異喩)。」

「宗」(梵語 Pratiṅgā または pakṣa)とは、主張、提案の意味で、立論者が新しく提唱し論證しようとする所の命題、「因」(梵語 hetu)とは、立論者が自己の「宗」を相手に承認せしめるための論證の根據であり、「喩」(梵語 udaharana または dīṣṭānta)とは、その例證、例喩、^(注12)實例である。

してみれば、「宗」とよばれる命題は、連珠の「斷案」に相當し、「因」は「理(由)」に、「喩」も「喩」に、一應、あたる。

こうしたことから、連珠を論理學にむすびつけて解釋しようとする人があつても不思議はない。嚴復はかつて、連珠のもつ、かかる「科學的」機能だけを抽出して、形式論理學の術語「三段論法」(syllogism)の譯語として「連珠」の名をつかつた。嚴復は、恐らく軽い氣持でそうしたのであろうし、「三段論法」という夢のない名よりは、言葉としては美しいけれども、やはり人々を誤解にみちびきやすく適切でない。早く章士釗によつてもこの點を指摘されたというが、杜國庠も、嚴復が「連珠」の名をもつて

「三段論法」を翻譯したのは、「連珠の性質をはつきりさせていなかつたため、附會をまぬがれぬ」といつてい^(注19)る。

重要なことは、杜國庠がいうように、連珠の推論方法は、「三段論法」の屬する演繹推理ではなくて、蓋然的推理たる「類推」つまり歸納推理であるということである。たとえば、

「臣聞く、郁烈の芳は委灰より出で、繁會の音は絶絃より生ずと。是を以つて貞女は名を没世に要し、烈士は節に當年に赴く」(「演連珠」其十四首)

「臣聞、郁烈之芳、出於委灰、繁會之音、生於絶絃、是以貞女要名於没世、烈士赴節於當年」

についてみる。この章は「烈士貞女の身死してのち名彰るるを明かにする」(呂延濟注)ものであるが、そのことと、郁烈たる芳香が、灰の中よりたちのぼり、最上の音楽は、絃がたちきれた瞬間にこそ響きわたるといふことは、直接には結びつくことではない。つまり「郁烈の芳は委灰より出で、繁會の音は絶絃より生ずる」という前提が真であるとしても、そのことから、結論が必然的にみちびかれるとは

陸庾連珠小考 (横山)

かぎらない。もしそう考えたとするならば、それは陸機の獨斷にすぎぬ。前提と結論がむすびつき得るものと考ええるには、その間にロマンチズムが介在してこそ可能となるのであつて、前提の眞なることを認める人でも、身後の名譽の問題に關するかぎり、「伯夷・叔齊賢なりと雖も、夫子を得て名益ます彰わる」と斷じて、「閭巷の人、行を砥ぎ名を立てんと欲する者は、青雲の土に附するに非ずんば、惡んぞ後世に施かん哉」と痛切な遺言を遺すということもあり得るのである。

つまり、この場合、前提は結論の若干の根據とはなるが決定的のものでなく、結論は蓋然的であるにすぎない。

推理が「三段論法」たり得ない理由は簡單である。比喩は必ずしも眞ならず、つまり、比喩と結論の主概念が不周延であるからである。この場合、前提の部分を構成する命題は、「音」とか「芳」とかの自然の事象であり、結論の部分を構成する命題は「名」とか「節」とか「人事の問題である。

比喩を用いて結論の眞なることを證明するためには、比

喩が、結論の主辭をもふくむ客觀的存在たることを要する。

杜國庠は、「墨子」の「小取」篇の一節、

「その然るや、其の然る所以あり。其の然るや同じきも、其の然る所以は必ずしも同じからず。其の之れを取るや之れを取る所以あり。其の之れを取るや同じきも、其の之れを取る所以は必ずしも同じからず。是の故に譬、侷、援、推の辭は、行いて異に、轉じて詭^いわり、遠くして失い、流れて本を離る。則ち審かにせずんばあるべからず、常には用うべからざるなり。故に言は、多方、殊類、異故、なれば偏觀すべからず」

を引いて、「必ず喩を假りて以つて其の旨を達する」連珠の根據する推理は、ここにいう「援」、つまり類比推理であることをのべて、事物の現象と本質を混同すれば、その勢、必ずただ「その然る」を知つて「その然る所以」を知らず、結局、必ずや事物の真相に「遠」くして謬「失」に陥るとのべ、それゆえ、慎「審」しなければいけないし、輕がるしく「常用」すべきでなく、同時に、「言」を聽くにあたつては、「偏觀してはいけない」のであると、比喩

による推理の最も重要なポイントに言及している。

さて、陸機の連珠の運用する推理の方法が演繹推理でなく、歸納推理であるとして、この意味を考えてみたい。

陸機が、演繹的認識のための枠組みではなく、歸納的認識のための枠組みたる連珠を愛したのは、かれの認識の構造に深く根ざしていると考えられる。

陸機の認識の特徴は、先にもふれたように、一本の線上を出発點から終點にむかつてひたすら走るといふような、線的なものではなく、面的なものであるということである。換言すれば、かれの認識は、時間的ではなく空間的であるうとする。

いつたいに、中國人の認識方法に、面的、空間的な要素の根強く存することは、驚くばかりである。

——いのちやはなにぞは露のあだものを あふにしかへば
おしからなくに とものり

古今和歌集卷十二にのせるこの歌は、もちろん多分に、極端な言語によつて相手の注意を獲得せんとする本旨に出ずるものであろうから、割り引きしてかからねばなるまい

が、ともかく、こうした線的な認識のかたちを、早くから美と感じ、價值的なものと考える傾向がわれわれ日本人に根深く存することは否定しがたい事實である。

——可以取、可以無取、取傷廉、可以與、可以無與、與傷惠、可以死、可以無死、死傷勇、取るべく取ることなかるべきときに取れば廉を傷そこなわん。與うべく與うることなかるべきときに、與うれば惠を傷そこなわん。死すべく死することなかるべきときに、死すれば勇を傷そこなわん。

〔孟子〕、離婁第四

このような頭腦の構造からは、先の相聞歌は決して産み出されないであらう。

對句の根強い存在、またその上に成立した駢文という認識の枠組みは、かかる空間的な認識の要請する必然の産物である。對句も、したがって、認識の逆方向にむかう「反對」がまさるとされるのは、きわめて當然といえよう。

眞理に達せんとして、先ず「殊途」の相に腐心し、「百慮」の努力を重ねようとするのが連珠制作における陸機の基本姿勢である。陸機によつて萬象は、分析され比較され

つつ統一される。陸機の連珠を構成する單位命題は、それぞれテーゼ、アンチテーゼの役割をになつているのであつて、讀者は、それがいかなるジンテーゼにたかめられるか、その瞬間に發する火花の幻妙な色彩をこそ注視すべきである。

工藤好美教授によれば、詩人T・S・エリオットの思考には、「進みながらしりぞき、ひとめぐりして、到着點と出發點がかさなるような仕方では進む」辯證法的方法と、「世界と人間の本質の全體的な直感から始まり、あらゆる推論がその直感によつて確かめられるために、たえず出發點にたちかえつてくる」神話的方法の二つの面があつて、一つの心のなかに結合されているという。工藤教授は實に見事にそれを説かれたが、^(注14)ひるがえつてわれわれが連珠という文體を考えると、辯證法的方法と神話的方法という柱の立てかたは、きわめて示唆にとむ。連珠全體としては、この二つの面が似た様相で並存すると思われるが、陸機の分擔したのは、特にその「辯證法的」側面である。

「本質の全體的な直感」から出發する「神話的方法」に似

た側面を、特に分擔しているのが、次にのべる庾信である。

Ⅲの3 效果または時間

世界への對處のしかたが、空間的であることを反映して、陸機の連珠は、その構造においても、いちじるしく空間的である。一章全體としては、それを構成する命題相互間のダイナミックな屈折、推論の形式としてみればあいには、その高度化、また命題を構成する對句相互間のあざやかな映發性、啓示性、こうした細部の特徴も、すべて陸機個人の認識の空間擴大性に由來するものであつて、讀者の腦裏には、一言で蔽えば、斷絶の感覺として印象される。一方、庾信の連珠は、作者の世界の把握のしかたが、時間的であることを反映して、その構造においても、時間的である。構造が時間的であるというのは、次にのべる諸事實から歸納される。

連珠の形式を、論理學的關心からのみ考察することの危険は、すでにふれた通りではあるが、陸機の連珠の場合には、やはり、そうした關心にもとづく考察の誘惑にかられ

るのも自然であるほどに、推論形式は高度化していた。すくなくとも、陸機の連珠のあるものにあつては、その推論の形式は、「因明」のそれとほとんど擇ぶところがなほどこである。ところで庾信の連珠の場合は、現象の背後に存在する因果の法則への關心は、陸機の場合のごとくには、第一義的ではない故に、もはや「因明」に比擬されるほどの完備した推論形式をもつものではなく、陸機の連珠の形式に近いものとしては、すでにふれた第十五首（「三世用兵」章）など、少數の例を挙げ得るのみである。そうして、庾信の連珠のおおむねは、いかに巧みな比喩を使用するとも、つまりは現象の直叙にすぎないのである。そのうえ、使用される比喩は、

「蓋し聞く、水の激するや實に其の源を濁し、木の蠹^{むじく}うや將に其の根を抜かんとすと。是を以つて延年の家、預め墓を掃かんことを論じ、羊舌の族、先ず門を滅ぼさんことを知る」（第四十一首）

「蓋聞、水之激也、實濁其源、木之蠹也、將拔其根、是以延年之家、預論掃墓、羊舌之族、先知滅門」

のごとく、同一内容の反復であること、ほとんど例外がないといつてよい。

意味の上から反復されるばかりでなく、對句の配列のしかたそのものも反復的になる。

陸機の場合、對句は、ほとんど例外なく隔句對をなしている。第八首を例にとれば、

(臣聞)

鑑之積也無厚——而照有重淵之深
目之察也有畔——而眊周天壤之際

(何則)

應事以精——不以器
造物以神——不以器

(是以)

萬邦凱樂——非悅鍾鼓之娛
天下歸仁——非惑玉帛之惠

のごとく配列される。一方、庾信の場合、對句は、比率の上からは隔句對がなお多きに居るとはいえ、注目すべきは單對の頻用である。第一首を例にとれば、

(蓋聞)

經天緯地之才
拔山超海之力

陸庾連珠小考(横山)

戰陣勇於風颺
謀謨出於胸臆

斬長鯨之鱗
截飛虎之翼

(是以)

一怒而諸侯懼
安居而天下息

(印は韻)

のごとく配列されてくる。陸機の連珠は無韻で、原則として隔句對により構成され、庾信の連珠は、原則として有韻(第十六首「營寬不反」章のみ無韻)であつて、單對を頻用するのである。この事實は次のように考えることを許す。

すなわち、陸機の連珠は、主辭あり賓辭ある多數の命題を敷陳、構成することに目標がおかれる故に、一句は長くなり、その長い句が並列されると、自然隔句對ができあがるのであつて、その際、句は意味内容の展開を主な任務としているため、音調の面からいえば一章を構成するリズムの單位は大まかにならざるを得ないのである。庾信の連珠は、それに對して、もはや命題の敷陳、構成は第一義的ではなく、「珠」が「連」なること、換言すれば反復される

リズムのもとたらず効果そのものが重要なのである。連珠の文體のもつ概念的側面よりも、感覺的側面が意味をおびてくる。陸機の連珠が「屈折」、「斷絶」する點に意味があつたのに對して、庾信の連珠は「反復」、「連續」する點に意味があるのである。

この點を、さらに具體的に觀察しよう。いま述べたように、庾信の連珠は、單對を用いることによつて、一定した小さなサイクルのリズムを讀者の腦裏に感覺させるのであるが、この無限に永く續く反復の感覺を効果的にするため、對句は正對がむしろ意識的に採用され、さらには正對である單對の内部で使用される虚字までも、同一のものが意識的に反復されるにいたる。第二十首の前半は、隔句對のまま、虚字を反復使用することによつて、連續のリズムを生みだそうとした例である。

(蓋聞)

嚴霜之零——無所不肅
長林之斃——無所不標

(是以)

楚壘既填——遊魚無託
吳宮已火——歸燕何巢

あるいは第十二首の前半は、單對であつてそのうちに同一虚字が反復される。

(蓋聞)

穀林長送
蒼梧不從
惟桐惟葛
無樹無封

(是以)

隋珠日月——無益驪山之火
雀臺絃管——空望西陵之松

卒章、第四十四首前半の單對も、小さなサイクルで同一の音が反復されて有効である。

(蓋聞)

三關頓足
長城垂翅
既羈既旅
非才非智

(是以)

烏江艤櫂——知無路可歸
白雁抱書——定無家可寄

ところで、かかる反復のリズム、持續の感覺が生みだす効果とは何か。われわれは、次にこの間にたちいらねばな

らぬ。そうしてこの問題も、世界に對する庾信の立場ないしは態度と深くかかわつてゐるのである。

さきに見たように、庾信の連珠の内容上の特色は、それがもつばら、自己の「身世」を敘するにあり、梁の盛時の描寫よりはじまつて、「思歸之客」、「羈旅之臣」たる現在の自己の確認にいたる過去のすべてのエピソードを時間の帶の上においていつたものである。

庾信はたしかに彼の過去について多く語つた。しかし重要な點は、彼の語るのは、すでに過去のものとなつた事實そのものではなく、過去を語るとなみを通して、現在の自己そのものを表白することである。彼の語ろうとするものは、アウグスティヌスのいわゆる「過ぎ去つた事柄そのものではなく、事柄そのものが感覺を通じて行きながら、^(註15) いわば自分の痕跡として魂に刻みつけた表象」であつて、^(註16) 庾信の連珠における時間は、現存在の自己關心、内的體驗の側から捉えられた時間である。

まこと、庾信の語ろうとするものは、あれやこれやの過去の事實そのものではなく、現に絶え間なく流れつつある

時間のうえに現出する、現在なる過去である。それは、庾信じしんが、明らかに告白するとおり、かの、

「蓋聞、五十之年、壯情久歇、憂能傷人、故其哀矣、是以譬之交讓、實半死而言生、如彼梧桐、雖殘生而猶死」
(第二十七首)

という現在からする言葉である。この章、前半の破格の措字が、重い時間の流れに必死に抗する庾信の懸命の抵抗を示して迫眞力をもつが、次の一首は、絶ちきらんとしてなお絶ちきれぬ過去の時間との魂のかかわりを、むしろ澄明な靜謐さをともなつて歌つてゐる。

「蓋し聞く、十室の邑にも忠信在り焉と、五歩の内にも芬芳録す可しと。是を以つて日南の枯蚌も猶お明月の珠を含み、龍門の死樹も尙お咸池の曲を抱く」
(第三十一首)

「蓋聞、十室之邑、忠臣在焉、五歩之内、芬芳可録、是以日南枯蚌、猶含明月之珠、龍門死樹、尙抱咸池之曲」

かかる魂にとつて、連珠の生みだす、反復しつゝ持續するリズムは、もはや必然の要請である。

陸機にあつては、連珠を構成する各單位句は、音の單位として獨立していると同時に、意味の單位として他の單位句から排他的に自己を區別しようとするものであつた。たとえば第一首

臣聞／日薄星廻／穹天所以紀物／山盈川沖／后土所以播氣／五行錯而致用／四時違而成歲／是以／百官恪居／以赴八音之離／明君執契／以要克諧之會／

において、日薄星廻／穹天所以紀物とゆつくり展開される一句は、山盈川沖／后土所以播氣なる一句と同化するのではなくて、むしろ異化せんとする意欲を帯びて配列されている。前者が天空の事象であつて、地上の事象である後者から、意味の上からも異化せんと意欲するのに應じて。同様に、百官恪居／以赴八音之離とゆつくり展開される一句は、明君執契／以要克諧之會なる一句から自己を區別せんとする意欲を孕むこと、前者が人臣についての、後者が君主についての敘述であるという意味上の異化性に呼應する。

これに對して、庾信の場合は、最終章、

蓋聞／三關頓足／長城垂翅／旣羈旣旅／非才非智／是以

／烏江艤檝／知無路可歸／白雁抱書／定無家可寄／

に例をとつて見れば了解されるように、三關頓足／長城垂翅と小さな單位で反復される二句はもはや相互に排しあうのではなくて、意味の上からも同一方向の反復であるように、讀者の（つまり作者の）感性をも一定の振幅の内に固定すべき音の流れをかたちづくつてゐる。かくて準備された心的状態は、續く旣羈旣旅／非才非智という同様に四拍の音の連續によつて、さらに同化の方向にむかつて一層固定される。そこで、烏江艤檝／知無路可歸／白雁抱書／定無家可寄／と讀誦される二句が續いても、すでに異化の意欲は麻痺しきつてゐるので、この音の連續によつてもたらされるものは、外界の個々の事象に對する區別の欲望をからめとつて、そうした日常の場では、はるか背後におしやられていた內的自我の蘇生を可能にする、新しい舞臺の創造である。この状態は、一種の夢の状態であつて、夢の中でこそわれわれは、日常の雜駁な精神によつては決して捕えることのできなかつた世界を、神話的に知覺してしまふことができるといふ事實に近似する。

連珠のもつこの特性によつて、庾信の心的領域は、全く新しい次元に活動の場をもつことになるのである。陳那の門弟である商羯羅主（しやうきやうらふしゆ）によれば、「因明」にも、相手に自己の論議を悟らしめることを目的とする「悟他」の方法と、自ら論理を探求する「自悟」の方法とがあるという。（注17）庾信の連珠は、まさに「自悟」の連珠というべく、陸機のそれをかしらとする傳統的な連珠が、「悟他」を任務としたの對し、質的に對蹠關係にある。

IV 倫理的人間と美的人間

以上、われわれは陸機と庾信の連珠の文體上の特徴について、その主なものをあげてみてきたのであるが、文體というものがその人の認識のしかたと相關の關係にあるとすれば、最終に、二人の人となり、世界觀についても若干の點を確認しておいた方がよいと思う。

*

私は、テーマと文體の構成のしかたについて、陸機の特徴としては、その認識が個別よりも普遍を、時間的である

陸庾連珠小考（横山）

よりも空間的であることを、強調した。これらの特性は陸機の人となりのいかなる特性に由來するのであろうか。結論から先にいつて、それは陸機の世界觀が強固に傳統的な中國人の世界觀—儒家的世界觀—に根ざしていることを反映している。その政治的生活における大いなる破綻、その文學の高度の美文性、またその文學を蔽うペシミズム、それにもかかわらず陸機の世界觀は、終始一定の位置に自身を保っている。

宰相陸遜を祖父に、將軍陸抗を父にもつこの美文家は、世界の見方において、骨の髄まで儒者であり、度し難いますらおであつた。

彼は、目の前の世界が多くの悲惨をともなつて壊滅していくのを見ておりながら、世界の存立に關しては終に根源的な疑いを感じずることはなかつた。そして、世界の一部分である自己についても、彼にとつて、この世は強固な實質であることは疑いのないことであつた。

「臣聞く、影を覽て質を偶うれば獨を解す能わず。迹を指し遠きを慕えば遅きを救うなしと。是を以つて虚器に、

循う者は物に應ずるの具にあらず。空言を翫ぶ者は治を致すの機にあらず。」(第十八首)

「臣聞、覽影偶質、不能解獨、指述慕遠、無救於遲、是以循虛器者、非應物之具、翫空言者、非致治之機」

世界は實體として彼の前によこたわつてゐる。世界の實體であることを疑うなどということは、「虚」であり「空」であり、迷妄である。世界が實體として彼の前におかれてゐる以上、士である彼はそれを「治」める義務がある。

陸機にあつては、かく、個人より天下が價值として先行する。なぜなら、天下は個人の上にある「大利」であり、天下に従事することは個人に従事することより義よしきこと、「義」であるから。

「臣聞く、理の守る所は勢の常に奪う所なり。道の閉ずる所は權の必ず開く所なりと。是を以つて生は利より重し。故に圖とに據りて劔を揮うの痛みなし。義は身より貴し。故に川に臨んで迹を投ずるの哀なみみあり」

(第四十四首)

「臣聞、理之所守、勢所常奪、道之所閉、權所必開、是以生重

於利、故據圖無揮劔之痛、義貴於身、故臨川有投迹之哀」

したがつて、陸機が「個人」として遭遇した眼前の世界の壊滅も「天損」ないしは「時累」として彼の外部に存在しなすぎぬのである。彼の内部は微動だにせず温存された。

「臣聞く、性に足る者は天損も入る能わず。期きに貞なる者は時累も淫する能わずと。是を以つて迅風陵雨も晨しん露の察さつを謬みよらず。勁陰殺節も寒木かんぼくの心を凋しぼまさず」

(第五十首)

「臣聞、足於性者、天損不能入、貞於期者、時累不能淫、是以迅風陵雨、不謬晨露之察、勁陰殺節、不凋寒木之心」

後世、陸機の處世と文學に對しては、毀譽半ばするようである。宋の葉適などは、彼の修辭上の成就には價值を與えつつも、行爲者としての陸機には、甚だきびしい批判を加注18えている。しかし豊富な文采の背後にあるものは、行爲に對する強烈な信仰である。近代、章炳麟は、共に亡國の士である王士禛との比較において、陸機の「風義」の王氏と同日に語るべからざるゆえんを強調したのは、的にあつた言注19といふべきであらう。

一方、陸機を亡國という共通のめぐりあわせに生きた先人として、絶えず意識していた庾信は、しかしながら、先人と同じ立場を持するには、時代が推移しすぎていた。庾信は、もはや儒家的世界觀の決定的破産の明らかになった時代にあつて、心情的に同じようとする陸機が、すでに彼の同志たり得ないことを痛恨していたにちがいない。

陸機は、根本において倫理の人、倫理の段階に留り得る人であつた。世の中には實體があつたから。倫理の人には、たとえば郷國の覆滅は、外から無理難題をふきかけて侵入する外國軍隊の狼藉のようなものであつて、非をならして抵抗しさえすればよいのである。R・ベネディクトが用いた「恥」（＝外面的）と「罪」（＝内面的）という圖式的表現をかりるなら、陸機に認められるものは「恥」である。^(注20)しかるに庾信は、彼の眼前の世界が變化したばかりでなく、彼の内部も、とりかえしのつかない變化をうけてしまつたことを認めざるを得なかつた。自分でどう辯解してみようとも、庾信は、自分が「老幼を提挈」（「哀江南賦」）して生活を維持するために「義」を賣り拂つたこと、そうして

陸庾連珠小考（横山）

「開府儀同三司」としてアンニユイにみちた日日を送つてゐる事實をいつわることではできなかつた。

「蓋し聞く、卷施けんし死せずんば誰か心有るを必せんや。甘蔗かん自しよ自ら長ず、故に節無きを知ると。是を以つて螺蚌らぼうの路を得る、恐らくは驪淵りえんに異ならん。雀鼠とそ同に歸るも、應に丹穴には非ざるべし」（「擬連珠」第三十八首）

「蓋聞、卷施不死、誰必有心、甘蔗自長、故知無節、是以螺蚌得路、恐異驪淵、雀鼠同歸、應非丹穴」

必死に儒家的據點の確保にあがいてはみても、庾信はすでに魏周にあつて「自ら長じ」ているのである。しかも大官の祿を食みつつ。辯解は無効である。

「蓋し聞く、君子は其の道無ければ則ち其の財を有つ能わず、その貧を忘るれば則ち其の食を恥ずる能わずと。

是を以つて顔回は瓢飲するも慶封の玉杯より賢なり。子思の銀佩は虞公の垂棘より美うわし」（第四十首）

「蓋聞、君子無其道、則不能有其財、忘其貧、則不能恥其食、是以顔回瓢飲、賢慶封之玉杯、子思銀佩、美虞公之垂棘」

孔子はわれわれを教導していつていたではないか。「不

義にして富み且つ貴きは、我れに於いて浮雲の如し」と。
不義にして富み且つ貴き徒輩を、孔子はあれほど悪んでい
たではないか。「君子は仁を去りて、悪くにか名を成さん」
と。聖人に見はなざれるということは、庾信のような律儀
な人にとつて、奈落につきおとされることである。

聖人から、そしてあらゆる規範から見はなざれて、庾信
はひとりて荒野に立つていた。庾信のいわゆる「羈旅」と
は、文化上の傳統の崩壊からくる精神の故郷の喪失、生の
根據の脱落、すなわち「地盤喪失」 *podanlos* を意味する。

庾信にとつて確實なものは、感覺だけであつた。連珠の
構成要素たる比喻は、陸機の場合、主として論理のために
あつたが、庾信の場合、感覺のため、すなわちイメジャリ
の充足のためにある。

「蓋し聞く、營魂反らず、燐火宵に飛び、時に獵夜の兵
に遭い、或いは空亭の鬼に斃ると。是を以つて射聲の營
の風雨、時に冤魂有り、廣漠郡の陰寒、偏えに夜哭多し」

(第十六章)

「蓋聞、營魂反、燐火宵飛、時遭獵夜之兵、或斃空亭之鬼、

是以射聲營之風雨、時有冤魂、廣漠郡之陰寒、偏多夜哭」

こうした見地から、北遷後における庾信の山水詩の意味
なども新たに検討されるべきであろう。また庾信は、かの
時代にあつて當然豫想されることながら、老莊的境地に時
に身をまかせることもある。^(注21)しかし、私見によれば、庾信
は老莊的境地にはついに安住出来ないままに生を終えたと
思われる。そのためには、「個」にめざめすぎていたから
である。

かつて錢穆教授は、孔子より李斯に至る三百年間の學術
思想を、「平民階級之覺醒」と規定したのにつづけて、魏
晉南朝三百年間のそれを、また、「個人自我之覺醒」にあ
つたといつた。^(注22)六朝末の政治的混亂は、「個」の自覺を、
一層推し進めるのに有利に作用したと思われるのであつて、
個人の人格の意識を、普遍的存在というあいまいな意識の
なかに分散させてしまう「牛鬼蛇神」から、わずかながら
脱却したという點で、庾信は陸機よりは進歩した段階にあ
つたといひ得よう。それはまた、中國の社會も進歩の法則
の例外ではなかつたことの證左でもあるが。

(了)

- (1) 李兆洛「駢體文鈔」卷二九。
- (2) 鈴木虎雄「徐庾の文章」(支那學第十卷第三號、昭和十六年七月)。
- (3) 高橋和巳「陸機の傳記とその文學(下)」第四章、(中國文學報第十二冊、一九六〇年四月)。
- (4) 六朝期の連珠作品は、藝文類聚がその五七卷に、太平御覽および文苑英華がそれぞれその五七〇卷、七七一卷に「連珠」の一體をさいて集中的に保存するほか、文選李善注、正史等に引かれる。今、漢以後六朝末に限って、ともかくも作品の傳存する作家の名をあげれば、確認しえたかぎりでは、揚雄、班固、杜篤、蔡邕、潘勗、魏文帝、王粲、陸機、謝惠連、顔延之、王儉、劉祥、梁武帝、梁宣帝、梁簡文帝、沈約、吳筠、劉孝儀、庾信の十九家、制作の事實のみ知れて、作品の佚亡せるもの、服虔、傅毅、桓譚、劉珍、韓說、趙岐、傅玄、張華、謝靈運、丘遲、黃芳、陳證の十二家があげられる。なお、唐以後については、作品の傳存するもの、唐の蘇頌以下清の王暉にいたる十一家、制作の事實のみ知れて、作品の佚亡せるもの、唐の康顯等をあげうる。
- (5) 文心雕龍雜文第十四、自連珠以下擬者間出、杜篤賈逵之曹、劉珍潘勗之輩、欲穿明珠、多貫魚目、可謂壽陵匍匐、非復邯鄲之步、里醜捧心、不關西施之嘆矣、唯士衡運思、

陸庚連珠小考(横山)

- 理新文敏、而裁章置句、廣於舊篇、豈慕朱仲四寸之瑤乎、夫文小易周、思閑可瞻、足使義明而詞淨、事圓而音澤、磊磊自轉、可稱珠耳、
- また南史の隱逸沈麟士傳によれば、麟士は隱居して教授するに、陸機の連珠を重んじて、毎に諸生の爲めに之れを講ず云云とみえ、六朝におけるその文の盛行を物語っている。なおまた、隋志によれば、梁代には何承天による陸機の連珠の注が存した。文選の劉孝標の舊注は、即ち何注を組織して文を成したものである。(駱鴻凱「文選學」附編二、文選專家研究舉例、陸士衡)
- (6) 「戲爲六絕句」其一。
- (7) 姜亮夫「陸平原年譜」、一九五七年上海古典文學出版社、九八頁。
- (8) I. A. Richards: Principles of Literary Criticism, 1924 London. P. 261 Chapter XXXIV: The Two Uses of Language. また C. K. Ogden and I. A. Richards: The Meaning of Meaning, 1923 London. p. 139 Chapter VII: The Meaning of Beauty. 前者は岩崎宗治氏による邦譯(「I. A. リチャーズ」文藝批評の原理)一九六二年東京垂水書房)、後者には石橋幸太郎氏による邦譯(オグデン・リチャーズ共著「意味の意味」、初版昭和十一年興文社、最新版昭和四十二年東京ベリかん社)がある。
- (9) 梁任昉「文章緣起」の「連珠」の條に附けた明の陳懋仁

の注(「學海類編」所收)にいう、「北史李先傳、魏帝召先讀韓子連珠二十二篇、韓子、韓非子、書中有聯語、先列其目而後著其解、謂之連珠、據此、則連珠又兆韓非」。清の章學誠「文史通義」内篇一、詩教上、にいう、「韓非儒說、比事徵偶、連珠之所肇也、前人已有言及者。而或以爲始於傳毅之徒、傳玄之言、非其實矣」。金桓香「駢文概論」、民國三三年商務印書館、第一章「上古至周駢體之起源」、「韓非子之駢文」、二九頁にいう、「内外儒說、尤爲連珠體之所昉、淮南子說山、即出於此、漢班固以後、遂遞相摹倣矣」。清の孫德謙「六朝麗指」にいう、「連珠之體、彥和謂肇始揚雄、此說不然、或謂源於韓非儒說、斯得之矣、以吾攷之、其體創於鄧析子、又非出自韓非也」。

山田勝美氏「鹽鐵論」(昭和四十二年東京明德出版社)二、十三頁「鹽鐵論の文體」にいう、「文體としての連珠體は、後漢において班固・賈逵・傅毅などによつて始められたと説かれているが、本議一(四)の文學の語などは、連珠體に髣髴たるものがある。……著者は鹽鐵論の文體の内に、すでに後の連珠體の萌芽を認めるものである」。

(10) 晉、傅玄「敘連珠」(文選陸機演連珠李善注、藝文類聚五十七、太平御覽五九〇等に載す)にいう、「……其文體、辭麗而言約、不指說事情、必假喻以達其旨、而賢者(藝文類聚、太平御覽並作「覽者」、文選注作「覽者」)微悟、合於古詩勸興之義、欲使歷歷如貫珠、易觀而可悅、故謂之連

珠也」。

もつとも、傅玄のこの解説は、それじたい「晉代の修辭主義の流れに浮ぶもの」であるという高橋氏の指摘は常に考慮の中に入れる必要がある。

(11) 駱鴻凱「文選學」附編二、文選專家研究舉例、陸士衡、「演連珠五十首」、「體式」。

(12) 法藏館「佛教學辭典」二七頁。なお、因明については、宇井伯壽「佛敎論理學」昭和十九年東京大東出版社、松尾義海「印度論理學の構造」昭和二十三年大阪秋田屋、等を参照。

(13) 人民出版社「杜國庠文集」五〇一頁、「紅棉屋札存」九、譬喩。

(14) 工藤好美「T・S・ユリオットにおけるくりかえしについて」(土居光知・工藤好美著「無意識の世界」昭和四十二年東京研究社所收)

(15) アウグスティヌス「告白」(渡邊義雄氏譯、筑摩書房「世界古典文學全集」26所收)

(16) アウグスティヌスによれば、時間の内的秩序は、記憶と直觀と期待の三契機に配分され、それが「過去の現在」「現在の現在」「未來の現在」として説明される。(「告白」第十一卷第二十章) こうした時間意識は、後にフッサールやベルグソンによつて徹底的に追究される。

(17) 商羯羅主は商羯羅塞縛彌、骨鍊主、天主などとも呼ばれ

る。その書「因明入正理論」は玄奘によつて譯され「大藏經」に收められる。宇井伯壽「佛敎論理學」三〇九頁以下参照。

(18) 葉適「習學記言」卷三〇(「敬鄉樓叢書」第一輯所收)

にいう、「……然機於文字組織錯綜之間、實有其功、雖古今豪傑命世者、亦有所不能預此、不可不知、觀其譏切曹閭、以退爲高、而託寄非所、勳烈不就、竟夷其族、乃知文人能言者多、能行者少、固無取於智也、」

(19) 章炳麟「薊漢昌言」五にいう、「陸機兄弟、吳之世臣而

仕于晉、世病機詩平緩、無故國之思、然觀其赴洛詩、首稱希世無高符、營道無烈心、末稱惜無懷歸志、辛苦誰爲心、……此亦疚心之語矣、……見仕晉非其本心、故託漢以自見爾、近代詩人、稱朱彝尊王士禛、朱尙有感激、王則忽然忘

其本矣、……舉世推王爲詩宗、風義焉得不衰、」

(20) ベネディクトの「恥」と「罪」の問題については、柳田

國男「罪の文化と恥の文化」(原題「尋常人の人世觀」、昭和二十五年五月「民族學研究」第十四卷四號、「柳田國男集」第三十卷所收)及び、作田啓一「恥の文化再考」一九六四年四月「思想の科學」、一九六七年九月筑摩書房刊「恥の文化再考」再録、參照。特に作田教授は「恥」が「公恥」(public shame)と私的な「羞恥」の兩面を含む點を問題とされる。

(21) たとえば、樂府詩集卷七八雜曲歌辭十八に收められる「步虛詞」という道敎的な作品は、庾信の創始にかかるとである。

(22) 錢穆「國學概論」民國二十年上海商務印書館、一五〇頁。